

研究ノート

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿 第六帖 (4) — 薄・篠薄・荻・蘭 —

福田 智子・木村 望・青木 聡美・桐谷 早織

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した類題和歌集である。収載歌には、『万葉集』『古今集』『後撰集』など、出典の明らかかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌、あるいは本歌との本文異同がきわめて大きい歌もある。本稿では、第六帖の薄・篠薄・荻・蘭の四つの題に配されている歌から、それらに該当する歌を撰び出し、注釈を施す。

凡例

- 一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、出典考証をもとに、出典未詳歌、あるいは本歌との本文異同がきわめて大きい歌について注釈を加えるものである。
- 二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を()を付して記す。
- 三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。
- 四、本文は、歴史的仮名遣いに統一し、踊り字を解消して当該の文字に改め、底本の表記を()に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「・」を付す。なお、漢字仮名の区別は底本のままとする。

五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なりのみを示す。諸本とその略称は次のとおりである。

- 永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)
- 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称(松)
- 内閣文庫蔵「和学講談所」印本 略称(和)
- 内閣文庫蔵「江雲涓樹」印本 略称(江)
- 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称(林)
- 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称(宮)
- 和歌山大学附属図書館紀州藩文庫蔵田林義信氏旧蔵本 略称(紀)
- ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称(黒)
- 寛文九年版本 略称(寛)

なお、諸本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロ・紙焼き資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

(永) 細川家永青文庫叢刊3『古今和謠六帖(下)』(汲古書院、昭和五十八年一月) 所収の影印

(松) 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料(寛) 架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集の名称(『新編国歌大観』の目次に拠る)、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。

七、考察 考察中での和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」(歌集名・部立・歌番号・作者名・詞書)とする。『万葉集』の番号は、新・旧の順で表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必要に応じて、歌集名に底本の名称を冠することもある。

注 釈

三七〇〇(すすき)

【本文】

きみとはむ人にはあはで秋風になびくをばなをみてやかへらん

【校異】 ○かへらん―帰らん(黒)

【語釈】 ○きみとはむ人 「きみ」は尾花を指し、女性にたとえる。

「人」は尾花を見るために秋の野を散策する人。女性のもとを訪れる男性にたとえる。 ○秋風 「秋」に「飽き」を掛ける。 ○をばな 薄

の花穂。形が獣の尾に似ていることからいう。『歌ことば歌枕大辞典』「尾花」の項(植木朝子氏)によれば、尾花のそよぐさまを、人を招くしぐさに見立てる用法は、平安期に入って急速に広まったという。○みてやかへらん 「や」は反語。尾花を見るだけでそのまま帰ることなどできない、の意。

【通釈】

あなたのもとを訪ねる人には出会わないで、恋人に飽きられ、秋風に靡く尾花(あなた)を見て、このまま帰れようか、いや、帰れやしない。

【他出】 なし

【考察】

初句の「きみ」は「尾花」を指すと見て、初句と第二句で、尾花を見にやってくる人が誰もいない様子を表すと解した。「語釈」でも指摘したとおり、尾花が風になびく様子は、人を招く動作に見立てることが多い。当該歌においても、恋人に飽きられ、訪問が途絶えてしまった女性に、男性の訪れを手招きして待つ様子を重ねる。その尾花をただ見るだけでは帰れないという、女性に心惹かれる男性の立場での詠である。

「きみとはむ人」という表現は、『新編国歌大観』には他例を見ないが、「とはむ人」ならば、「風にしもなにかまかせん梅花よそへてとはむ人をこそまで」(公任集・一六・返しかたはらにおしつくる)、「あめもよにふりはへとはむひともなしなきにおとりていける身ぞうき」(万代集・恋五・二五六三・梅壺女御・題しらず)という歌が見られる。いずれも、作歌時点では訪問者不在の状況を詠んでいる。

「秋風になびくをばな」の用例には、「そよとしもなにかこたへむあきかぜになびくを花を見てもしりなん」(一条撰政御集・一五〇・かへ

し)がある。この歌は、男女間の贈答歌のうちの女性からの返歌だが、自らを「あきかぜになびくを花」にたとえ、恋人に飽きられた自分の姿を重ねている。他にも、「秋風になびくをばなはむかしよりたもとにてぞこひしかりける」(大和物語・第十七段・二五・少将)、「たもとともしのばざらまし秋風になびくをばなのおどろかさずは」(大和物語・第十七段・二六・いではの)というような、「たもと」とともに詠まれた歌がある。

結句「みてやかへらん」は、「ちるとのみみてやかへらんさくらばなはなのおもはむこともあるものを」(躬恒集・三九二・屏風)という歌に、その用例を見出すことができる。

三七〇六(すすき)

【本文】

をぐらやまふもとのべの花すすきほのかにみゆる秋の夕暮

【校異】○「集付」—新古秋上(黒) ○ふもと—もと(黒)

【語釈】○をぐらやま 山城国の歌枕。嵯峨の西にある山。大堰川が西南の麓に流れる景勝の地。「小暗(し)」を掛ける。「ほのか(に)」は縁語。○花すすき 穂の出た薄。ここでは、花薄が麓一帯に広がる情景を表すとともに、「穂(ほ)」と同じ語頭音をもつ「ほのか(に)」を導く。○ほのかに 光が弱く、色や形が定かでないさま。「ほ」に「穂」を掛ける。

【通釈】

ほの暗いという名の小倉山の、麓の野辺に生える一面の花薄の穂が、か

すかにそれと見える、秋の夕暮れの美しさよ。

【他出】

『和漢朗詠集』卷上秋、二三二番

(秋晩)

をぐらやまふもとのべのはなすすきほのかにみゆるあきのゆふぐれ

『新古今集』卷第四秋歌上、三四七番

(題しらず)

よみ人しらず

をぐらやまふもとの野べの花すすきほのかにみゆる秋の夕ぐれ

『定家八代抄』卷第四秋歌上、三四三番

同(新)

よみ人しらず

『歌枕名寄』卷第二、七五五番

麓野辺

新古四 花薄

読人不知

小倉山ふもとのべのはなすすきほのかにみゆる秋の夕ぐれ

【考察】

「をぐら(の)やま」が「小暗(し)」という名をもつことに着目した歌は、「大井河うかべる舟のがり火にをぐらの山も名のみなりけり」(後撰集・雑三・一一三一一・なりひらの朝臣・大井なる所にて、人人さけたうべけるついでに)、「あやしくもしかのたちの見えぬかなをぐらの山に我やきぬらん」(拾遺集・夏・一二八・平兼盛・九条右大臣家の賀の屏風に)、「もみぢせばあかくなりなんをぐら山秋まつほどのなにこそありけれ」(拾遺集・夏・一三五・よみ人しらず・題しらず)など、

数多い。

「をぐら(山)」の「ふもと」を詠んだ歌が勅撰集に採られるには、『新古今集』を待たねばならない(当該歌の他、冬部六〇三番の西行法師歌)。もっとも、私家集や歌合においては、「月は出でて入るとこそきけ小倉山ふもとにきてはかへるものは」(清慎公集・七五・女御のもとにおはしたるに、かへらせ給ひねときこえたまへれば)、「みだれずて木の下闇にをぐら山麓にしかをとすあき人」(海人手古良集・一六・夏)、「あさぎりはたつともみえずいとどしきをぐらのやまのふもととおもへば」(保明親王帯刀陣歌合・一四・たひらのさねなほ・右)といった例が、平安中期にも見られる。けれども、景物として薄を詠む例としては、「をぐら山ふもとの尾花袖みえてたえだえはるる秋の朝霧」(新続古今集・秋下・五四二・前大納言公泰・貞和百首歌に)、「白露や草の袂にをぐら山ふもとのすすき朽ちはつるまで」(夫木抄・巻十一・四三四八・民部卿為家卿・貞応二年名所百首)、「小倉山ふもとの霧のあさあけに尾花しほれて秋風ぞふく」(続門葉集・秋上・二四三・阿闍梨頼胤・薄の歌とてよみ侍りける)というように、時代は鎌倉期以降に下る。あるいは、当該歌が『新古今集』に採歌されたことによる影響か。なお、「ふもとののべ」という表現には、「くらぶ山麓の野べのをみなへし露の下よりうつしつるかな」(源順集・一三三三・わけのありただ・をみなへし)という、『古今六帖』成立と同時期の用例を見出すことができる。同様に、第四句の「ほのかにみゆる」を用いた類歌として、「ゆふぎりにほのかにみゆるをみなへしわれよりさきにつゆやむすばん」(続古今集・秋上・三三四・中務卿具平親王・草花をよめる)、「月影にほのかに見ゆる華すすきかぜのたよりにむすびつるかな」(元真集・六一・天

徳三年九月十八日にかうしに、中宮の女房歌合せむといふによめる 花すすき)、「春わかみほのかにみゆるこのめには秋こそいとど遠くみえけれ」(宇津保物語・かすがまうで・一五三・ひやう衛のじよう藤はらのちかまさ)、「なみまよりほのかにみゆるいさり火にこがれやすらんあまのつりぶね」(重之子僧集・二二二・いさり火をみはべりて)といった例が挙げられる。とくに、「花すすき」を詠んだ『元真集』の例は、当該歌と景物が一致する。

なお、「秋風になびくゆふべの花すすきほのかにまねく立ちとまりなん」(順集・一三〇・源すけまさの朝臣・すすき)という歌は、『女四宮歌合』二番にも、第三句「しのすすき」として載る。当該歌とは、近景と遠景という視点の相違はあるが、夕刻の薄を「ほのかに」という語を用いて詠んだ点に、共通性を見出すことができよう。

結句「秋の夕暮」の例は、『万葉集』には見られず、勅撰集においては、『後拾遺集』初出である。八代集の中では『新古今集』が最も多い。

三七一二(しのすすき)

【本文】

としふとも我わすれめやあふさかのしののをすすきおひはてぬとも

【校異】なし

【語釈】〇としふ 「年経」で、年月を経る意。〇わすれめや 「わ

する」の未然形に推量の助動詞「む」の已然形、係助詞の「や」がついて反語を表す。わすれるだろうか、いやわすれない。〇あふさか 滋賀県大津の逢坂にある山。逢坂山。〇しののをすすき 篠薄に同じ。

篠は群がつて生える竹類の意。篠と薄、または群がり生えている篠や薄、またはまだ穂の出していない薄を指すという。三七一三番「語釈」「しのすすき」参照。○おひはてぬとも 「生ひ果つ」は、すっかり生長してしまいう意。内閣文庫蔵「和学講談所」印本・神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本、同林崎文庫旧蔵本は「生」の字をあてる。ただしここは、「老い果つ」(年をとってひどく衰える意)を重ねていると見た。

【通釈】
たとえ年月を経ても私は忘れるだろうか、いや忘れまい。たとえ逢坂山に生えている薄がすっかり生長してしまいうように私がひどく年老いてしまっても。

【他出】
『夫木和歌抄』卷第十一秋部二、四四二二番

薄、六一
読人不知
年ふともわれ忘れめやあふさかのしののをすすきおひ出でぬらん

『隆源口伝』四二番
年ふとも我忘れめやあふさかのしののをすすきおひはつるまで

【考察】
「としふとも」の用例は、「海原を遠く渡りて年経とも児らが結べる紐解くなゆめ」(巻二十・四三三八・四三三四)という歌が『万葉集』に見える。勅撰集初出は『古今集』で、「みわの山いかにまち見む年ふともたづぬる人もあらじと思へば」(恋五・七八〇・伊勢・仲平朝臣あひしりて侍りけるをかれ方になりければ、ちちがやまとのかみに侍りけるもとへまかるとてよみてつかはしける)という歌がある。伊勢には他に、「としふともいづもわれこそわすれずのはまちどりとはなきわたり

つれ」(夫木抄・卷二十五・一一七五六・わすれずのはま、陸奥 家集)という歌もあり、上句の意味内容が当該歌の初句・第二句の表現と酷似する。なお、「としふとも」の例は、『古今六帖』に、当該歌の他三例(第三・一六二四、第五・二八六六、同・二九五三。ただし、一六二四と二八六六は下句に若干の異同はあるが同一歌と見なされる)が見出されるが、いずれも出典未詳歌である。

「我わすれめや」という句は、『万葉集』から用例が見える。「秋山に霜降り覆ひ木の葉散り年は行くとも我忘八(ワレワスレメヤ)」(万葉集・卷十・二二四七・二二四三・右柿本朝臣人麿之歌集出)とあるように、結句に用いられることが多い。ただし、当該歌のように、第二句に見えることもあり、『古今六帖』にも、「つらくともわれわすれめやあき山になくしかばかりちぎりしものを」(古今六帖・第五・二八七六・わすれず)という出典未詳歌がある。勅撰集における初出は、「紅のはつ花ぞめの色ふかく思ひし心我わすれめや」(古今集・恋四・七二三・よみ人しらず)であるが、勅撰集においては、他に『後拾遺集』(春上・一一八)、『新古今集』(神祇・一八六三)に各一首見出されるのみである。私家集では、先の万葉歌が若干の歌句の異同をともなって『家持集』一八番に見え、また同集には他に、「いもがいへぢわれわすれめやあしひきの山かきくもりゆきはふるとも」(二四八)といった歌があるが、平安中期の用例は他に見出せない。

「しののをすすき」の歌は、『万葉集』にはなく、八代集においても、『金葉集』初度本秋部三四四番、『同』二度本異本歌六八〇番にも載る。「いまはしもほにいでぬらむ東路のいはたのをのしののをすすき」(千載集・秋上二七一・藤原伊家・思野花といへる心をよめる)が唯一の例

である。私家集の例も、『新編国歌大観』による限り、十世紀までの用例は見出せない。初期の用例としては、かろうじて『更級日記』に、「冬がれのしののをすすき袖たゆみまねきもよせし風にまかせむ」(六一・作者)とある程度である。ただし、当該歌では、長い年月を経ることを、「しののをすすき」「おひはてぬ」という比喻で表現しているが、この『更級日記』の歌は、生長しきって枯れた「しののをすすき」を詠んでいる点、留意しておきたい。同様の例としては、「冬がれのしののをすすき打ちなびきわかなつむ野に春風ぞ吹く」(新千載集・春上・三七・前大納言為家・おなじ心を「元亨四年後宇多院にて十首の歌講ぜられける時、若菜」)という後世の例がある。

なお、「あふさか」と「しののをすすき」との組み合わせは、『新編国歌大観』においては他に唯一、「行きてみん露も盛にあふ坂のしのの小穂穂にいづるころ」(芳雲集・一八八一・行路薄)という江戸期の用例を見出すのみである。

ただし、「あふさか」と「しのすすき」の組み合わせならば、「わぎもこに逢坂山の皮為酢寸(シノススキ)穂には咲き出ず恋ひ渡るかも」(万葉集・卷十・二二八七・二二八三)があり、後に、『古今集』墨滅歌・一一〇七番にも、下句を「ほにはいはずもこひわたるかな」として載っている(「しのすすき」については、次の三七一三番「考察」参照)。この歌では、逢坂山のまだ穂が出ていない若い篠薄を素材として、恋人を慕い続けていることを詠んでいる。一方、『六帖』の当該歌では、恋人のことを一生忘れないと誓うが、人の一生を、同じ逢坂山の篠薄を素材に、生長し切って枯れてしまうまでの期間として比的に表現する。両歌の素材の共通性ととも、篠薄の若さと老いが好対照をなすという点

からも、当該歌が、先の万葉歌を念頭に置いて作られた可能性は高い。なお、「他出」に挙げた本文について、『夫木和歌抄』は、結句が「おひ出でぬらん」であり、篠薄は今頃生えてきただろうという現在推量の表現になっている。また、『隆源口伝』の本文「おひはつるまで」だと、年を取って朽ちてしまうまで忘れない、の意となる。

三七一三(しのすすき)

【本文】

秋風はややふく野べのしのすすきほにいでぬこひはくるしかりけり

【校異】なし

【語釈】○やや だんだん程度が増していく様子を表す。少しずつ。次第に。○しのすすき まだ穂を出していない薄。「穂に出づ」を導く。

【考察】参照。

【通釈】

秋風がだんだん吹く頃の野辺の、まだ穂を出さない篠薄のように、思いを顔色に出さない恋は、こんなに苦しいものだったのだ。

【他出】なし

【考察】

第二句に見える副詞「やや」の用例は、「あき風はややふきしけばのをさむみわびしき声に松虫ぞ鳴く」(後撰集・秋上・二六一・つらゆき・題しらず)、「荻の葉もやうちそよぐほどなるをなごかりがねのおとなかるらん」(拾遺集・秋・一六二・恵慶法師・八月ばかりに、かりのこゑまつうたよみ侍りけるに)、「をぎかぜもややふきまさるこゑすなりあ

はれ秋こそふかくなるらし」(後拾遺集・秋上・三二三・藤原長能・花山院歌合せさせたまはむとしけるにとどまりはべりにけれどうたをばたてまつりけるに秋風をよめる)、「あさぼらけ荻のうはばの露みればややはださむし秋の初かぜ」(新古今集・秋上・三一・曾禰好忠・題しらず)などが挙げられる。秋の到来、あるいは秋が深まっていくさまを実感する歌が多い。

また、「しのすすき」の歌は『万葉集』から見られる。ただし、『新編国歌大観』(底本は西本願寺本)を検して得られる全四例のうち、「現代の万葉学の立場で最も妥当と思われる新訓」(万葉集解題)においても「しのすすき」と読んだ例は、「細竹為酢寸」(巻七・一一二五・一一二一)という表記の一例のみである。これは、群生した細い竹を指すと推察される。

残り三例はいずれも「皮為酢寸」(巻三・三二〇・三〇七、巻十・二二八七・二二八三、同・二三二五・二三一一)と表記され、西本願寺本では「しのすすき」、新訓では「はだすすき」という訓が施される。『校本萬葉集』を繙くと、三二〇(三〇七)番歌については「かはすすき」(類聚古集・古葉略類聚鈔・神田本)や「ひのすすき」(温故堂本)、二二八七(二二八三)番では「なみすすき」(元暦校本の右楮書き入れによる本文)や「はなすすき」(類聚古集)、最後の二三一五(二三一一)番では、『万葉集』諸本においては異訓は見出されないものの、『袖中抄』に「皮ス、キ」とあり、訓は必ずしも一定していない。

これらの万葉歌のうち、「わぎもこに逢坂山の皮為酢寸穂には咲き出ず恋ひ渡るかも」(万葉集・巻十・二二八七・二二八三)、「皮為酢寸穂には咲き出ぬ恋をあがする蜻蛉のただ一目のみ見し人ゆるに」(万葉集・

巻十・二三二五・二三一一)の二首は、「皮為酢寸」が「穂には咲き出ず(ぬ)」を導く。西本願寺本他の伝本の訓が「しのすすき」であるとすると、「ほにいでぬ」を導く当該歌に先行する類例として、留意すべき歌である。なお、前者は、『古今集』墨滅歌、一一〇七番(下句「ほにはいでもこひわたるかな」)にも載っている。なお、この「しのすすき」の本意から、「逢ふ事をいざほにいでなんしのすすき忍びはつべき物ならなくに」(後撰集・恋三・七二七・あつただの朝臣・しのびてすみ侍りける女につかはしける)、「しのぶればくるしかりけりしのすすき秋のさかりになりやしなまし」(拾遺集・恋二・七七〇・勝観法師・題しらず)というように、「しのすすき」は、同音をもつ動詞「忍ぶ」と結びついていく。

さて、「ほにいでぬこひ」という表現は、平安中期においても、「山かげにつくる山田のこがくれてほに出でぬ恋ぞわびしかりける」(貫之集・五六六・恋)、「山かげにつはるやまだのみがくれてほにいでぬこひによをやつくさん」(書陵部藏御所本躬恒集・三四一・ふかやぶがひとぎねぐして、だい三を卅首づつよみ侍りけるに、人しれぬ恋を)という例が挙げられる。いずれもその表現の前に、比喩的序詞が用いられる。

下句に見える「……こひはくるしかりけり」という表現は、「かくれぬのそこのしたくさみがくれてしられぬこひはくるしかりけり」(伊勢集・三三三)に存する。『古今六帖』には他にも、「山かげにつくる山田のこがくれてほにいでぬこひはくるしかりけり」(第二・九七一・山だ)、「なつの野のしげみにさけるひめゆりのしられぬこひはくるしかりけり」(第六・三九二五・ゆり)という歌がある。前者の出典は『貫之集』五六六番、後者は『万葉集』巻第八、一五〇四(一五〇〇)番と見られる

が、当該箇所にも、『古今六帖』本文との間に異同が存する。とすれば、『古今六帖』内における、ひとつの類型表現として、捉えられようか。

三七一四（しのすすき）

【本文】

しのすすきほにいでずとも行く秋をまねくといはばそよとこたへよ

【校異】○いてすとも―出す□も（宮） ○行秋を―行秋のを（林）

【語釈】○しのすすき 三七一三番「語釈」参照。 ○行く秋 過ぎ去って行こうとしている秋。晩秋。 ○そよ しずかに風の吹く音、また、物が触れあつてたてるかすかな音などを表わす語。感動詞「そよ」（相

づちをうつ時にいう語）との掛詞。それぞれ。三七二〇番「語釈」参照。

【通釈】

篠薄は、まだ穂を出さなくても、過ぎ去つていこうとしている秋を呼び戻すと言うなら、そよそよと音を立てて「そうですよ」と答えておくれ。

【他出】なし

【考察】

「しのすすきほにいで（ず）」という表現は、先の『古今六帖』三七一三番に既出。「考察」を参照されたい。

第三句「ゆくあき」のごく初期の用例は、延喜十三年（九一三）九月に催された『陽成院歌合』に見える。「とどむれどいまはかぎりとゆく秋のわりなくをしくおもほゆるかな」（二七）、「もみぢつつしぐれふりいでてゆく秋をみねの朝霧たちもとめなん」（四〇）の二例があり、また、「すぎゆくあき」の例も五首ある。さらに、陽成院主催の歌合には、

他にも、「ゆくあきをまねくをばなのたもにはつゆもおきあへずのど

けからねば」（陽成院一親王姫君達歌合・三六）、「ゆくあきをとどむるこまのおそれればかぜこそさきにまづさそひけれ」（同・五〇）といった例も見出せる。とくに、『陽成院一親王姫君達歌合』三六番歌は、「ゆくあきをまねく」という表現が当該歌と一致する。また、この歌合歌が

「をばな」、すなわち穂の出た薄を詠んでいるのに対し、当該歌は、未だ穂の出していない「しのすすき」を題材としているものの、薄を詠んでいる点でも両歌は共通する。あるいは当該歌は、『陽成院一親王姫君達歌合』歌を念頭に置いて詠まれたものか。なお、『陽成院一親王姫君達歌合』三六番歌は、「あきのはてのころある古歌」であり、「『古歌』は貫之・宗于・是則、また読人不知歌などで、古今集前後の歌が多いようである」（『新編国歌大観』解題、杉谷寿郎氏）という。

「ゆくあき」という表現は「風」とともに詠まれることが多く、「行く秋の風にみだるるかるかやはしめゆふ露もとまらざりけり」（源順集・一五三・かるかや・こはひと）という例がある。

「すすき」と「そよ」との組み合わせは、「はなすすきそよともすれば秋風の吹くかとぞきく衣なき身は」（寛平御時后宮歌合・一〇四）が、ごく初期の例であり、他にも、「はなすすきほのくれがたのつゆけきはうきよのなかをそよとしればか」（保明親王帯刀陣歌合・一六・ふぢはらのありとき・右）、「ひとりぬるよをながづきはなすすきそよともあきのかげぞこたふる」（陽成院一親王姫君達歌合・四五）、「おもふことこめてはくるし花すすきほにいでていはんそよとこたへよ」（坊城右大臣殿歌合・四・ゆげひ・右）といった歌合歌や、「ほに出でていふかひあらば花すすきそよとも風にうちなびかなむ」（落窪物語・五・少将へ

道頼)、「人ならばかたらふべきをおもふことすすきはそよといふかひぞなき」(好忠集・二二〇・七月をはり)などがある。とくに、『陽成院一親王姫君達歌合』四五番、『坊城右大臣殿歌合』四番は、当該歌の「そよとこた(へよ)」という表現とも重なり、留意すべきである。

三七一九(をぎ)

【本文】

朝夕になでておほしおほしくさなればおひてみゆるぞ我がやどのをぎおほ

【校異】○をひてみゆるそ我やとのおき―おきひてみゆるそのはならは音宿の萩(和宮)

【語釈】○朝夕に 毎日の意。 ○なでて 動詞「なづ」は、子どもや小さな動植物をかわいがること。 ○おほしし 動詞「おほす」は、子どもや植物を育てる意。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。 ○おひてみゆるぞ 動詞「おふ」は、草木などが生ずる、生え伸びる意。「ぞ」は係助詞で強調。 ○をぎ イネ科の多年草。湿地に群生する。秋、薄に似た花穂を出す。薄より大型で銀白色である。

【通釈】
毎日大事に育てた草なので立派に伸びたように見えるよ、我が家の庭の荻は。

【考察】

「朝夕に」の用例は、『万葉集』に五例「卷二・五(五)、卷三・四四六(四四三)、卷四・七四八(七四五)、卷十九・四一九三(四一六九)、同・四二三五(四二一一)」見える。勅撰集においては、『後拾遺集』

(卷四秋上・三三〇)が初出であり、八代集においては、他に『千載集』に二例(卷一春上・四一、卷十五恋五・九四三)を見出すのみである。一方、私家集においては、「露の命はかなき物と朝夕にいきたるかぎりあひみてしかな」(小町集・四八)、「草の露おきしもあへずあさゆふにころかよはぬときしなれば」(宗于集・三六)、「かさまをばかけずまらなむあさゆふにみやのめいのるおのれならひに」(仲文集・七二二)、「あさゆふにあまのかるもはなになれやみるめのかたきうらとなりける」(斎宮女御集・一五四)、「あさゆふにいであつ見しをおぼつかかなひとのころのうつりうつらず」(朝光集・一一七・わづらひたまひて、ひさしうさぶらひにもいでたまはで、いひいだしたまへる)、「朝ゆふになれみし事をおもひいでよふき上のはまの風につけても」(円融院御集・六四・賀賀乳母、紀の国へくだりける時、餞たまふとて)といった歌が、十世紀後半までに散見される。

第二句「なでておほしし」は、『万葉集』に、「山吹は撫でつつ生ほさむありつつも君来ましつつかざしたりけり」(卷二十・四三二六・四三〇二・三月十九日家持之庄門槻樹下宴飲歌二首・右一首置始連長谷)という歌がある他、『古今六帖』の出典未詳歌にも、「なにしおへばいづれもかなしあさなあさななでておほししうなあこがはら」(古今六帖・第二・一〇三六・山のうへのおくら・はら)といった例がある。他にも、「いまよりはなでておほさむをみなへしときあるあきにあふとおもへば」(亭子院女郎花合・三一・のちかた)、「宿にこそなでおほしけめ女郎花など秋のの露にぬるらん」(清慎公集・六七・女やいかぎきこえたりけん)、「もろともに なでておほしし なでしこの つゆにもあてじとおもひしを……」(多武峰少将物語・四八)、「いにしへのかたみにこ

れや山がつのなでておほせるとこ夏のはな」(実方集・二〇九・むすめうせたる人、むまごかなしげにてあるを見て、おほちに)、「あしたづをなでおほしてしかひあればたちてしひなの千代」(多ぞまつ) (御堂関白集・二九・藏人少将子むませたりける七日の夜、とのよりつかはず、すはまに) など、平安中期の用例は少なくない。また、『宇津保物語』に二例、「なでおほすかひもなきかなさくら花にほふ春にもあはずと思へば」(宇津保物語・ふきあげの上・三一九・たねまつ)、「なでおほす松のはやしにこよひより千よをばみせよたづのむらどり」(宇津保物語・おきつしら波・六七五・うへ(朱雀院)) という歌が見出せる。女性や子どものイメージをもつ女郎花や撫子(常夏)などに対して、大切に慈しみ育む動作をいうが、当該歌のように、萩を対象とする例は珍しい。

結句「我がやどのをぎ」は、『万葉集』にはなく、勅撰集における初出も、『千載集』の「あききぬとききつるからにわがやどの萩のはかせの吹きかはるらん」(秋上・二二六・侍従乳母・秋たつ日よみ侍りける)を待たねばならない。私家集においては、「なほざりにほりうゑしものをわがやどのをぎのはかせにあきをしるかな」(重之子僧集・二四・院のおほせごとにて、またつかうまつる)、「ほりうゑしかひも有るかなわが宿の萩はのかせぞ秋もしらす」(和泉式部集・一四一・風)という用例が、初期のものとして挙げられよう。『重之子僧集』『和泉式部集』からは、前栽として萩を掘ってきて庭に植えたことが読み取れるが、当該歌においても、同様の状況が想定され得るであろう。

なお、内閣文庫蔵「和学講談所」印本および神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本の下旬の本行本文は、直前の三七一八番歌の下旬「おきのはならは音(はしてまし)」を、途中まで誤写してしまったものである。

三七二〇(をぎ)

【本文】

ことわりやうらむること秋かぜのそよそよをぎのはにぞおどろく

【校異】なし

【語釈】○ことわり 道理。物事の筋道。 ○うらむる 「うらむ」は、悲しみを誘うように風が音を立てるの意。 ○そよそよ 風が吹き、静かに葉がそよぐ音。感動詞「そよ」を重ねた語「そよそよ」との掛詞。

「そよ」は、三七一四番「語釈」参照。相づちをうつ時にいう語。それそれ。 ○をぎのは 萩の細長い線形の葉。風に吹かれると寂しい音を立てるものとして歌に詠まれることが多い。「をぎ」は、三七一九番「語釈」参照。 ○おどろく はっとして気づく。注意がひかれる。

【通釈】

悲しみを誘うような風の音がするのも道理である。秋風が萩の葉を揺らし、それぞれ、そうですよ、と言っているような風の音によって、秋の到来にはっと気づくよ。

【他出】なし

【考察】

「ことわりや」の用例は、『蜻蛉日記』天禄三年(九七二)八月の記事中にある「ことわりやいはでなげきしとし月もふるのやしのかみさびにけん」(下・二〇五) という歌が早い例であろう。十世紀後半の用例は他にも、「ことわりやしたはげにさぞひえつらんきみにしくべきものしなれば」(能宣集・三五四)があり、これに酷似する歌が『仲文集』二九番にも載る。勅撰集の初出は『後拾遺集』で、「ことわりやいかでかしかのなかざらんこよひばかりのいのちとおもへば」(雑三・九

九九・和泉式部) という歌である。以上の例からもわかるように、当該句は、初句に置かれる傾向にある。

「うらむること(も)」の用例は少ない。『伊勢集』五番にも載る「世を海のあわときえぬる身にしあれば怨むる事ぞかすなかりける」(後撰集・恋二・六一七・枇杷左大臣・題しらず)の他、「なきわびて身をうつせみとなりぬればうらむることもいまぞきこえぬ」(興風集・四六)、「思ふといふなにはたえせぬものなればうらむることはたれもおとらず」(仲文集・四六・返し)といった用例が見える程度である。

「そよそよ」の用例は、当該歌と同じ『古今六帖』出典未詳歌に、「さつきまつぬまにおひたるわかごものそよそよわれもいかでぞ思ふ」(古今六帖・第六・三八一四・こも)という例が見出せる。ただし、同時代以前の例としては、『新編国歌大観』を検しても、「あきかぜに吹かれてなびくをぎの葉のそよそよさこせいふべかりけれ」(元良親王集・二〇・宮ことわりとて)が指摘できるのみである。この歌は、浮気をした女性の言い分に、親王が納得して返歌したものである。「そよそよ」「をぎ」「あきかぜ」の組み合わせが当該歌と共通するのみならず、詞書にある「ことわり」という語も、初句の表現と重なってくる。和歌と詞書との両面において、類似性は高い。

「をぎのは」を詠んだ歌は、早くも『万葉集』に「葦辺にある荻の葉さやぎ秋風の吹き来るなへに雁鳴き渡る」(巻十・二二三八・二二三四)という例が見える。『古今集』には用例がなく、勅撰集初出は『後撰集』であり、「山里の物さびしきは荻のはのなびくことにぞ思ひやらるる」(秋上・二六六・左大臣・秋、大輔がうづまさのかたはらなる家に侍りけるに、をぎの葉にふみをさしてつかはしける)、「秋風の吹くにつけて

もとはぬかな荻の葉ならばおとはしてまし」(恋四・八四六・中務・平かねきがやうやうかれがたになりければ、つかはしける)他、合計三首がある。その他、八代集においては、『詞花集』に六首、『新古今集』に七首存する点が注目される。恋部の歌もあるが、秋の部立に配置されることが多い。荻の葉が秋風に吹かれて音を立てるさまを詠む当該歌は、秋の代表的な風物の一つと言えよう。「荻の葉のそよおとこそ秋風の人にしらるる始なりけれ」(拾遺集・秋・一三九・つらゆき・延喜御時御屏風に)は、荻の葉がそよぐ音によって秋の訪れを知るという点で、当該歌に一脈通じるものがある。なお、「をぎのは」に関しては、三七二二番「考察」も参照されたい。

「かぜ」と「おどろく」との組み合わせといえば、「あききぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」(古今集・一六九・藤原敏行朝臣)がまず想起される。後の『和泉式部集』『和泉式部続集』に、あわせて五首の用例がある点を付記しておきたい。

三七二二(をぎ)

【本文】

秋風の^むをぎのはをふくおときけばいよいよ我も物^もをこそ思へ

【校異】なし

【語釈】○をぎのは 三七二〇番「語釈」参照。○いよいよ 物事が加層的に進展するさまをいう。ますます。

【通釈】

秋風が荻の葉に吹く音を聞くと、ますます私も物思いをする。

【他出】なし

【考察】

「をぎのは」は、三七二〇番「考察」でも触れた通り、萩の葉がそよぐ音によって秋の訪れを知り、秋のわびしさを詠んだ歌が多い。当該歌も上句において、萩の葉に風が吹き、音をたてるという、典型的な場面を詠んでいる。そこに「我も」と詠歌主体を登場させることにより、その情景は「我」という一個人の心情に収斂する。

「おときけば」という表現は、八代集においては、『後拾遺集』に一例、『千載集』に二例の計三例のみ見出せる。一方、私家集では、「そらみみかけさふくかぜのおときけばわれおもはるるこそゑのするかな」（一条撰政御集・九一・しはすのせちぶのつとめて、かぜのあらければ、おとど）が早い例であり、その後は、「とやまふくあらしの風のおときけばまだきに冬の奥ぞしらるる」（和泉式部集・三〇一）、「をぎのはをなびかすかぜのおときけばあはれみにしむあきのゆふぐれ」（相模集・五四八）などが存する。当該歌も含めて、いずれも第三句に用いられている。なお、『相模集』の歌は、萩の葉擦れを聞き、秋の夕べのしみじみとした情景を詠んだもので、当該歌と情景が重なるだけでなく、上句の表現が酷似している。

「いよいよ」という語は、『万葉集』に、「昔見し象の小川を今見れば弥清（イヨイヨキヨク）なりにけるかも」（万葉集・巻三・三一九・三一六・反歌）という例が見える。当該箇所は、「現代の万葉学の立場で最も妥当と思われる新訓」（『新編国歌大観』『万葉集』解題）では「いよよ（さややく）」であるが、『校本萬葉集』に載る『万葉集』諸本では、「いよいよ（きよく）」とする（類聚古集にのみ「いよ〜」の左に「イ

ト、」の墨書がある）。また、『古今六帖』（第三・一五三〇・かは）に収載されるこの万葉歌の本文も、「いよいよきよく」である。『古今六帖』が平安中期の『万葉集』享受のあり方を示すとすれば、この万葉歌も「いよいよ」の例として数えることは許されよう。なお、『古今六帖』にはもう一例、「あひ見てはしばしはこひはなぎなんをおもへどいよいよこひまさりけり」（第四・二〇〇七・やかもちイ・こひ）という歌がある。これは、『万葉集』（巻四・七五六・七五三）の歌であるが、当該箇所は、『校本萬葉集』では「雖念弥（オモヘドイトド）」、『新編国歌大観』の新訓では「おもへどいよよ」とし、『古今六帖』本文とは異なる。ここでも、『古今六帖』は、「弥」字を「いよいよ」という訓で享受していたことになる。

八代集における「いよいよ」の用例は、『伊勢物語』第八十四段にも見える「老いぬればさらぬ別もありといへばいよいよ見まくほしき君かな」（古今集・雑上・九〇〇・業平朝臣のはのみこ長岡にすみ侍りける時に、なりひら宮づかへすとて時時もえまかりとぶらはず侍りければ、しはすばかりにははのみこのもとよりとみの事とてふみをもてまうできたり、あけて見ればことばはなくてありけるうた）の他は、「あふことはまばらにあめるいよすだれいよいよわれをわびさするかな」（詞花集・恋下・二四四・惠慶法師・題不知）という歌の合計二首である。私家集の例も、『新編国歌大観』による限り、先の『古今集』歌が『業平集』に、また、『詞花集』歌が『惠慶集』に載っている他は、「たかつきのいよいよたかくなりぬればすにはくれじみやのめの物」（仲文集・七三・略）かへし）が見出されるのみである。当該歌は、その少ない用例のひとつであるが、「いよいよ」物思いをするというのであるから、萩の

葉のそよぐ音を聞いて秋の訪れを知るといふ、初秋を詠んだ歌というよりはむしろ、秋も深まる頃の情景を詠んだ歌であろう。なお、物思いが募っていくという下句をも含めて、一首の情景は、「いとどしく物思ふやどの萩の葉に秋とつげつる風のわびしさ」(後撰集・秋上・二二〇・おもふこと侍りけるころ) という歌に重なってくるであろう。

結句の「物をこそ思へ」は、勅撰集においては『拾遺集』初出で、八代集中に十三例見出せる。そのうち、『拾遺集』の三首をはじめとして、計八例が恋の部立に配されている。「しめゆはぬのべの秋はぎ風ふげばとふしかくふし物をこそ思へ」(拾遺集・恋三・八三九・よみ人しらず・題しらず)は、当該歌の萩と同じ秋の景物である萩が、風が吹くままにあちこちに靡き伏すさまを比喻に用いて、恋の物思いを詠んだもの。同じ結句をもつ当該歌も、恋の思いを表現した要素を含むか。

三七二八(らに)

【本文】

そせい

をみなへしながふちばかま^おおりつれば秋のみぢをかめつけにして

【校異】○そせいーおなし人(松・和・江・林・宮・紀・黒・寛)

○かめつけにしてーかめつけにして(紀)

【語釈】○をみなへし 秋の七草の一。夏から秋にかけて、枝の先端部に黄色の小さな花が多数、密に集まって咲く。女性に喩えられることが多い。○なが 代名詞「な(汝)」に助詞「が」の付いたもの。おま^えが。ここでは「をみなへし」を指す。○ふちばかま 秋の七草の一。

秋、梢頭に淡紫色の頭花を密な散房状につける。和歌においては、多くの場合、衣服の袴にかけて詠み込まれる。○おりつれば 織つたので。植物「ふちばかま」の縁で「おる(折る)」を響かせる。○かめつけ 語義未詳。染色などのために糸や布を甕に漬すことをいうか。和歌山大学附属図書館紀州藩文庫蔵田林義信氏旧蔵本の書き入れに拠れば、「そめつけ」(図柄を染め出した布や衣服)。「考察」参照。

【通釈】

女郎花よ、おま^えが(藤)袴を織つたので、(私は)それに秋の紅葉を「かめつけ」にして。

【他出】なし

【考察】

「をみなへし」は、周知のとおり、『万葉集』から見える秋を代表する植物である。三代集に比較的多く、『後撰集』が二十四例で最多である。和歌においては女性に見立てられることが多く、「名にめでてをれるばかりぞをみなへし我おちにきと人にかたるな」(古今集・秋上・二二六・僧正へんぜう・題しらず)、「をみなへし秋の風にうちなびき心ひとつをたれによすらむ」(古今集・秋上・二二〇・左のおほいまうちぎみ・朱雀院のをみなへしあはせによみてたてまつりける)などの歌がある。秋の部立に配されることが圧倒的に多いが、おのずと恋の要素も合わせ持つ。また、八代集においては、「野」という語とともに詠まれることが多く、前掲『古今集』二三〇番歌の他、「秋ののにやどりはすべしをみなへし名をむつまじみたびならなくに」(古今集・秋上・二二八・としゆきの朝臣・是貞のみこの家の歌合のうた)など、計二十三首の用例が見られる。

「ふぢばかま」の歌は、『万葉集』では「萩の花 尾花葛花 撫子の花 女郎花 また藤袴 朝顔の花」(第八・一五四二・一五三八・山上臣憶良詠「秋野花」歌二首)の一首のみ存する。秋の野の花を列挙した歌で、藤袴もそれらの中のひとつである。しかし、『古今集』以降、植物としての実体よりも、「袴」という語を名にもつという点に着目されるようになる。「なに人かきてぬぎかけしふぢばかまくる秋ごとこのべをにほはず」(古今集・秋上・二三九・としゆきの朝臣・これさだのみこの家の歌合によめる)、「やどりせし人のかたみかふぢばかまわすられがたきかににほひつつ」(古今集・秋上・二四〇・つらゆき・ふぢばかまをよみて人につかはしける)、「ぬししらぬかこそにほへれ秋ののいたがぬぎかけしふぢばかまぞも」(古今集・秋上・そせい・ふぢばかまをよめる)、「秋風にほころびぬらしふぢばかまつづりさせてふ蟋蟀なく」(古今集・雑体・一〇二〇・在原むねやな・寛平御時きさいの宮の歌合のうた)といった例があり、「袴」の縁として、「脱ぐ」「ほころぶ」などの語とともに用いられる。八代集中の用例はごく少数であり、『古今集』のこの四例をはじめ、『後撰集』に一例、『金葉集』(二度本)に四例(橋本公夏筆本によればもう一例追加される)、『詞花集』に一例、『千載集』に一例、『新古今集』に一例存するのみである。

当該歌上句では、「をみなへし」や「ふぢばかま」が生える秋の野の風景をもとに、「をみなへし」に喩えられた女性が、「ふぢばかま」のその名のとおり「袴」を「織る」という行為を表現したものであろう。男性の衣類を整えるのは、女性の日常生活の一部である。

「秋のみぢぢ」(上代では「もみち」という句は、『万葉集』に二例、「うまさけ三輪の社の山照らす秋の黄葉(もみち)の散らまく惜しも」

(巻八・一五二二・一五一七・長屋王歌一首)、「手折らずて散りなば惜しと我が思ひし秋の黄葉(もみち)をかざしつるかも」(巻八・一五八五・一五八一・橘朝臣奈良麿結集宴「歌十一首」という歌が見出せる。八代集においては、「……涙の色の くれなゐは 我らがなかの 時雨にて 秋のみぢぢと 人人は おのがちりぢり わかれなば……」(古今集・雑体・一〇〇六・伊勢・七条のきさきうせたまひにけるのちによみける)、「君こふと涙にぬるるわが袖と秋のみぢぢといづれまされり」(後撰集・秋下・四二七・みなもとのととのふ・紅葉と色こきさいでとを女のもとにつかはして)の二例ある。中でも、紅葉と、紅涙に濡れた袖との染め色の濃さを比較する『後撰集』歌を念頭に置けば、当該歌において、紅葉は袴の色の見立てとも見られよう。

「かめつけ」という語は、『新編国歌大観』を検しても「おほやてらよはさかさまになりにけりいしさへさけてかめつけをする」(藤六集・二二・いしのかめにおお^マりたるを)の他に例を見ない。「かめ」ならば、「ひさしかれあだにちるなとさくら花かめにさせれどうつるひにけり」(後撰集・春下・八二・つらゆき・さくらの花のかめにさせりけるがちりけるを見て、中務につかはしける)に、桜の花を「かめ」にさす様子を詠んだ歌があり、花をさす「かめ」の存在が見えるが、「かめつけ」については後考を俟つ。

なお、「校異」に示すように、紀州藩文庫蔵本にある書き入れを生かせば、「そめつけ」という語が浮かび上がる。動詞「そめつく」(色や模様を染め出す)から、名詞「染め付け」を想定したのであろう。「そめつく」の用例は、『新編国歌大観』によっても、「紅の花にしあらば衣手に染め付け持ちて行くべく思ほゆ」(万葉集・巻十一・二八三八・二八

二七・問答)、「つきくさにそめひとかくぞいふかくそめつけつればうつろはずといふ」(奈良御集・一二)のわずか二首を見出すに過ぎない。だが、仮に当該歌を、「そめつけ」の語で解釈するならば、織った袴に紅葉の色(あるいは模様)を染め出す意となる。

附記

本稿は、歌語研究会(同志社大学文化情報学部学生研究会)の活動の成果であり、科学研究費補助金基盤研究(C)「文字列データ解析システムの構築と平安朝文学の伝本と表現に関する総合的研究」(課題番号22500236、平成二十二～二十四年度)における研究の一部である。

福田(三七〇〇・三七〇六・三七一三番)、木村(三七一二・三七一九番)、青木(三七一四・三七二〇番)、桐谷(三七二二・三七二八番)が分担執筆し、福田が原稿を取りまとめ、全体にわたる加筆修正をおこなった。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器「eCSA」Ver.2.00を使用した。

最後に、資料をご提供くださった宮内庁書陵部・島原図書館嶋原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

〈附録〉

『古今和歌六帖』別出歌一覧―第六帖（4）薄・篠薄・萩・蘭―

凡例

1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに（ ）を付して記す。

2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立を十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

第一巻 1 古今和歌集 4 後拾遺和歌集

第二巻 1 万葉集 6 和漢朗詠集

第三巻 1 人丸集 81 赤染衛門集

第五巻 1 民部卿家歌合 61 源大納言家歌合 長久二年、253 紀師匠曲水宴和歌

269 九品和歌、281 歌経標式（真本） 285 新撰髓脳 290 新撰和歌髓脳、347 古

事記 353 風土記、371 日本靈異記、372 三宝絵、389 土左日記 393 和泉式

部日記、414 竹取物語 420 落窪物語

第六巻 2 秋萩集 5 麗花集

第七巻 1 奈良帝御集 36 肥後集

3、別出歌は、『新編国歌大観』の巻数+通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。

〈例〉3-19貫之355 『新編国歌大観』第三巻19番目の『貫之集』355番歌

4、別出本文に異なる場合は、句ごとに「」を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異なるのみに限る。

5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざまな類似性を有するも

がある。そのまま別出歌とは認めにくいものの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、〈参考〉と記し、波線を付す。

6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として〈未詳〉と記し、傍線を付す。

別出歌一覧

すすき

3691 さをしかの人のすすき初尾花いつしか君にたまくらをせん

3-1人丸154「いつしかいもが」「たまくらにせん」、2-1万葉2281「いりののすすき」

「いづれのときか」「いもがてまかむ」

3692 我がやどのをばながうへのしらつゆをけたずたまにぬくものにもが

1-2後撰305、2-1万葉1576、3-3家持151「まつかげの」「あさぢがうへの」

3693 いかこやま野べにさきたる花みれば君がいへなるをばなおもほゆ（かなむら）

2-1万葉1537「はぎみれば」「をばなしおもほゆ」

3694 野べみればおふるすすきの秋わかみまだほいでぬこひもするかな（つらゆき）

3-19貫之601「草わかみ」

3695 花すすきはにおけどもはつしもの色は見えなくてきえぬべらなり（つらゆき）

3-19貫之83「色はみえずぞ」「消えぬべらなる」

3696 さとめてぞみるべかりけるはなすすきまねくかたにや秋のいぬらん（つらゆき）

3-19貫之516「秋はいぬらん」

3697 まねくとてきつるかひなくはなすすきほいでて風のはかるなりけり（おなじ人）

3-19貫之23

3698 いつとても人やはずはなすきなどか秋しもほにはいづらん (おなじ人)

3-19 貫之¹³⁴「人やはずはなすき」

3699 すぎがてに野べはへぬべし花すすきこれかれまねく袖のみゆれば (みつね)

3-12 躬恒⁴⁶⁶「のべにきぬべし」そでとみゆれば、7-5 躬恒¹¹⁷「野べに來ぬべし」

「袖と見ゆれば」

3700 きみとはむ人にはあはで秋風になびくをばなをみてやかへらん

〈未詳〉

3701 秋ののくさのたもとかはなすきほに出でてまねく袖とみゆらん

(あり原のむねやな) 1-1 古今²⁴³、2-2 新撰万¹⁰³、5-4 寛平后⁸⁶

3702 秋ののいでぬとならばはなすきはかなき空をまねきたててん (伊勢)

3-15 伊勢集⁴⁵「しのびにわれを」まねきやはせぬ、3-15 伊勢集⁴⁶「いづかたに」

「ありときかばか」まねきたてらん

3703 花すすき我こそしたにたのみしかほにいでて人にむすばれにけり

1-1 古今⁷⁴⁸「思ひしか」、3-15 伊勢集⁹「我こそふかく」むすばれにける」

3704 君がうゑしひとむらすすき虫のねのしげきのべとも成りにけるかな

1-1 古今⁸⁵³ 3'

3705 いかばかり風のつらさにはなすすきふきくるかたをまつそむくらん

3-45 檜垣²⁶「あきかぜの」心やつらき、5-416 大和²⁰⁶「秋風の」こころやつらき」

3706 をぐらやまふもとのの花すすきほのかにみゆる秋の夕暮

〈未詳〉 2-6 和漢朗²³²

3707 はなすすきかぜになびきてみだるはむすびおきてし露やとくらん (ふかやぶ)

3-39 深養父¹⁶

3708 いまよりはうゑてだにみじはなすすきほにいつる秋はわびしかりけり (さだ文)

1-1 古今²⁴²、5-269 九品和¹⁵

3709 秋づけばをばながうへにおくつゆのけぬべくわれはおもほゆるかな

(ひおきのながすがむすめ) 2-1 万葉¹⁵⁶⁸「けぬべくもわは」おもほゆるかも」

しのすすき

3710 めづらしき君がいへなるしのすすきほにいでて秋のすぐらくをしも

(いしかはのひろなか) 2-1 万葉¹⁶⁰⁵「はなすすき」ほにいつるあきの」

3711 いもがりとわがかよひちのしのすすきわれしかよはばなびけしのはら (人丸)

2-1 万葉¹¹²⁵「いもがり」

3712 としふとも我わすれめやあふさかのしのをすすきおいはてぬとも

〈未詳〉

3713 秋風はややく野べのしのすすきほにいでぬこひはくるしかりけり

〈未詳〉

3714 しのすすきほにいでずとも行く秋をまねくといはばそよとこたへよ

〈未詳〉

3715 いつもきく風とはきけどをぎのはのそよ音にぞ秋はきにける (つらゆき)

をぎ

3-19 貫之³⁸⁵「風をばきけど」

3716 をぎのはのそよ音こそ秋かぜの人にしらるははじめなりけれ (おなじ人)

1-3 拾遺集¹³⁹、1- 拾遺抄⁸⁸、2-3 新撰和⁸、3-19 貫之¹⁰⁰

3717 をぎのはにふきくるかぜぞ秋きぬと人にしらるるしるしなりけれ (みつね)

3-12 躬恒⁴⁴⁸「をぎのはの」ふきいつる風に「しるべなりける」、7-5 躬恒¹⁰²「を

3718 秋風のふくにつけてもとはぬかなをぎのはならばおとはしてまし

ぎの葉を「吹きいつる風ぞ」はじめなりける」

1-2 後撰 846、2-6 和漢朗 401、5-266 三十人 129、3-24 中務 230「吹くをりにしも」
朝夕になでておほしくさなればおひてみゆるぞ我がやどのをぎ

〈未詳〉

3720 ことわりやうらむることも秋かせのそよそよをぎのはにぞおどろく

〈未詳〉

3721 いとどしく物おもふやどのをぎのはに秋とつけつる風のわびしさ

1-2 後撰 220

3722 秋風のをぎのはをふくおときけはいよいよ我も物をこそ思へ

〈未詳〉

らに

3723 みな人のそのかにほふふぢばかまきみの御のたをわたるけふ

(さがのみかどの坊にて) 5-416 大和 256「そのかにめづる」「きみのみためと」「たを

りたるけふ」、5-350 日本後 10「みやひとの」「そのかにめづる」「きみのおほもの」「た

をりたるけふ」

3724 をり人の心のままにふぢばかまむべも色こく咲きてみえけり

2-3 新撰和 92「このすのまにまふ」「ほころびにけり」、5-350 日本後 11「このころのま

にま」「うべいろふかく」「にほひたりけり」、5-416 大和 257「をる人の」「心にかよふ」

「むべいろふかく」「にほひたりけり」

3725 なに人かきてぬぎかけしふぢばかまくる秋ことへのべをにほはす

1-1 古今 239、3-8 敏行 12、2-2 新撰万 137「あきくることに」

3726 やどりせし人のかたみかふぢばかまわすれがたきかはにほひつつ

1-1 古今 240「かにはほひつつ」

3727 ぬししらぬかこそにほへれ秋ののたがぬぎかけし藤ばかまども

1-1 古今 241、2-6 和漢朗 290、3-9 素性 20
をみなへしながふぢばかまおりつれば秋のもみぢをかめつけにして

〈未詳〉

3729 あきかせにほころびぬらしふぢばかまつりさせてふきりぎりすなく

1-1 古今 1020、5-4 寛平后 94「ほころびぬらむ」、2-2 新撰万 85「つぶりさせとて」